



👁️👁️ みどころ

一人の少年が小学生姉妹を殺害！そんな事件の後、警察には「犯罪者家族の保護」という重大な任務が……。犯罪捜査についてのマスコミ取材はどうあるべきか？そんな議論とは別に、今やネット掲示板への興味本位の書き込みはやりたい放題！その結果現在起きている深刻な問題とは？そんな目のつけどころに拍手！タイトルの意味を噛みしめながら、マスコミ報道とネット活用のあるべき姿をしっかりと模索しなければ……。

「目のつけどころ」に拍手！最優秀脚本賞受賞に拍手！

最近の各種「殺人事件」に対する興味本位のマスコミ報道のあり方に、私はいつも腹が立っている。そんな私としては、ある未成年者による小学生姉妹殺人事件のマスコミ報道に焦点をあて、「犯罪者家族の保護」をテーマとしたこの映画に対しては、その目のつけどころに拍手したい。

映画の冒頭、まず「未成年者による凶悪事件が発生した時、警察が犯罪者の家族を保護する場合がある。過去の事件で、犯罪者の家族がマスコミから非難され、自殺したケースが何度もあったからである。この件について、警察は公には認めていない」との字幕が流れるが、なぜ、警察はそのことを公に認めていないの？字幕を読んだ時私は一瞬そう思ったが、この映画を観るとそれがなぜかがよくわかる。それほど殺人事件における犯罪者の家族への国民の声を代表したというマスコミのバッシングは執拗かつ陰湿なわけだ。

目のつけどころがよければ、その脚本がいいのも当然。聞くとところによると、この映画は08年8月21日～9月1日に開かれた第32回モントリオール世界映画祭のコンペテ

イション部門で最優秀脚本賞を受賞したとのこと。目のつけどころと合わせて、この受賞にも拍手！

刑事の職場も蟹工船？

この映画の主人公は、佐藤浩市演じる勝浦卓美刑事。彼は上司である東豊島署暴力犯係係長の坂本一郎（佐野史郎）から若手刑事の三島省吾（松田龍平）と共に、犯罪者家族である加害少年の妹船村沙織（志田未来）の保護を命じられたが、これは予定していた家族旅行のための休暇の直前。今回の家族旅行は、仕事に明け暮れる刑事生活を共に過ごしていくことに疲れ果てた妻からの離婚の申し出をじっくり話し合うため、一人娘の提案によってやっと予定を組むことができた大切なもの。

そもそも加害者の家族を保護するという任務に納得がいかない上、事前に申請していた休暇願いまで没にされそうな勝浦の姿を見てみると、つい「警察の職場って蟹工船？」と思ってしまう。しかし、そんな勝浦と三島両刑事の口癖である「背筋が凍るような」任務であっても、仕事は仕事。せっかく娘へのプレゼントを買っていたのに、それを渡すことはもちろんそれを伝えることができないまま、勝浦はその任務に向かうことに……。

こんなのあり？脚本に異議あり！

カメラは冒頭、学校でクラスメイトたちとスポーツを楽しんでいる中学3年生の沙織の姿を映し出す。しかし、彼女が校門を出る頃には、校門の前は加害少年の妹の写真を撮り、その肉声を聞きたいマスコミの車でいっぱい。それをかき分けて沙織を勝浦の車に乗せて自宅まで連れ戻した勝浦と三島はもちろん、私もその後船村家の応接間で展開される風景にビックリ。

そこには家庭裁判所の関係者なども多数出席し、容疑者家族の保護マニュアルに則り船村夫妻に対して、離婚していただきます。その上で、再度婚姻していただきます。それによって妻は旧姓に戻り、娘の沙織も母親の姓を名乗っていただきます。と矢継ぎ早の指示が続き、その場で離婚届や婚姻届に署名捺印（拇印）させられるという風景が展開されていく。さらに 沙織に対しては、当分学校に行かなくていいように、就学義務免除の手続きまでも。

そりゃ、あれだけの人間が集まって半強制的に次々と指示されたらそれに従わざるをえないだろうが、それにしてもこんな風景ってあり？この点については、脚本に異議あり。

こりゃ明らかに、警察のミス？

このようにして家族3人がそれぞれ別々に保護されることになり、勝浦と三島は沙織を取調官達が待つ某ホテルへ連れて行こうとしたが、そこで始まったのが三島の運転する車とマスコミの車とのカーチェイス。これも多少誇張気味で、現実にはここまで激しいカー

チェイスはないだろうが、面白いのは、ここに勝浦の過去の「ある事件」を知る新聞記者梅本孝治（佐々木蔵之介）が登場すること。そのためこの後は、梅本の調査がいろいろと進展していく中、ストーリー展開は俄然厚みを増していくことに・・・。

それはともかく、その後起きる大事件が自宅で保護されていたはずの母親の自殺。彼女がなかなかトイレから出て来ないことを心配した捜査員たちは今度もトイレのドアを叩いていたが、内部からは何の反応もなし。そこに駆けつけた勝浦が「こりゃバイ！」と思ってドアをぶっ壊してみると、中で首を吊っていた母親はすでにアウト状態。勝浦が懸命に蘇生術を施してもダメだったから、さあ大変。これだけの捜査員が見張っていたのに、なぜこんな事態に？こりゃ、明らかに警察のミスでは？

そんな結果を聞いた沙織が泣き叫び、目の前にいる勝浦を警察代表として不平不満の限りをぶちまけたのは当然。もし、私が弁護士として沙織や沙織の父親から相談を受けたとすれば、絶対警察に対する損害賠償請求が可能だと説明し、訴訟提起を勧めるところだが・・・。

韓国のあの美人女優も自殺！

韓国の美人女優崔真実（チェ・ジンシル）が08年10月2日に自殺したのを知ってる？『誰が俺を狂わせるか』（95年）と『手紙』（97年）で観た彼女は、実にキュートな美人。もっとも、野球ファンのあなたなら、巨人軍のピッチャー趙成珉（チョ・ソンミン）と結婚して芸能界を引退した女優と言った方が有名？

沙織の母親は保護された当日にパニック状態となり衝動的に自殺してしまったが、結婚、引退、離婚の後再び芸能界に復帰していたチェ・ジンシルは、なぜ自殺したの？それは、自殺したある男性タレントに彼女が大金を貸していたという悪質な噂がインターネット上に広まったことによる精神的落ち込みらしい。そしてこれは、韓国において昨年の2人の女性タレントの自殺に続く「新たな犠牲者」と受け止められているとのことだ。

そこで現在韓国で大論争になっているのが、ネット規制の是非。ネット書き込みの実名義務化や虚偽事実の流布を被害者の告訴なしに処罰できる「サイバー侮辱罪」の新設を柱としたネット規制を強める法律（「崔真実法」）の制定を求める与党ハンナラ党に対し、野党側は「悲劇を利用した言論統制」と反発しているが、さてその行方は？自殺者が日本を上回る韓国ではネット規制を求める声は切実。しかし、『誰も守ってくれない』の後半におけるネットへの書き込み騒動をみていると、日本でもそれが不可欠という感を強くするが・・・。

精神科医って、ホントにこんなにリッチなの？

刑事をやっている、いろいろな人種と知り合うのは当然だが、勝浦と尾上令子（木村佳乃）との関係は少し不自然。勝浦家の夫婦の危機は勝浦の浮気が原因ではなく、過酷な

職場環境によるものだが、勝浦と令子との微妙なやりとりをみていると、こちらにも多少原因があるのでは、とつい勘ぐってしまう。

バイリンガル女優木村佳乃は『ブラインドネス』(08年)でその能力を遺憾なく発揮したが、『誰も守ってくれない』では、勝浦が連れてきた沙織を見守る精神科医という役。昨今、医師についてもその過重労働が社会問題になっているが、令子をみていると全然そんな問題はなさそう。だって緊急の勝浦からの要請を受けて自分のマンションに勝浦と沙織を受け入れているうえ、一晩ゆっくりとその面倒をみてやるのが可能なのだから。

またビックリするのは、令子の住むマンションの豪華さ。ここは都心のマンションのようだが、その広さやダイニングの豪華さにビックリ。何階かわからないが、これが超高層マンションの最上階だとしたら2~3億円という物件のはず。まだ30代と思われる女性精神科医って、ホントにこんなにリッチなの・・・？

勝浦はなぜ本庄夫妻のペンションへ？

沙織をかくまう予定のホテルはすぐにマスコミにバレてしまったうえ、勝浦の過去を知る執拗な新聞記者梅本の追及によって、令子のマンションまで嗅ぎつけられた勝浦はさてどこへ？そう思っていると、沙織を乗せて向かったのは、勝浦が家族旅行先として予約していた伊豆の海辺にあるペンション。つまり、勝浦にとってここしか行くあてがなかったというわけだ。なるほど、なるほど。

このペンションの経営者は、本庄圭介(柳葉敏郎)と久美子(石田ゆり子)夫妻。なぜペンションの経営者の役にこんなビッグネーム2人を配しているの？誰もがそう思うはずだが、それは勝浦と本庄夫妻とのその後のやりとりをみていると少しずつ明らかに。つまり、勝浦が心に傷を負う3年前の「あの事件」の全貌が少しずつ明らかにされていくわけだ。この映画がモントリオール世界映画祭で最優秀脚本賞を受賞したのは、きっとこのやりとりがストーリーに厚みを加えているため。したがって、そんな大人の会話と葛藤ぶりをしっかりと味わいたい。

梅本からの執拗な追及と今やそれをはるかに超えたネット掲示板への匿名による悪意に満ちた書き込みの中、ついにこのペンションの前にも多くの報道陣が集結してきた。確かに1人の少年による小学生姉妹殺人事件は大事件だが、報道陣は一体何のためにこんなに集まっているの？私見では、その中でまともな報道はごく一部。その大半は、興味本位で読者の関心を煽るだけの記事を書いているのでは・・・？

彼氏も信頼できないとは・・・

今ドキの中学3年生の女の子は早熟だから、彼氏の1人や2人がいても当然・・・？ちなみにその点は、同じ中学3年生の女の子でも、『キューポラのある街』(62年)で吉永小百合が演じたジュンとはえらい違い・・・。本庄の経営するペンションの中で籠城状態

となっていた勝浦と沙織を突然訪れて来たのが、沙織の彼氏である園部達郎（富浦智嗣）だ。

ネット上であふれるように流れている情報を見て心配になり、一人で駆けつけてきたという達郎の姿をみていると頼もしい限り。今ドキの若者も捨てたものではないと思ったのだが、この彼氏、何となく変な雰囲気・・・？そんな私の予感がピタリと当たったのは何と達郎が泊まった翌朝、沙織が達郎と共にペンションを逃げ出してしまったこと。勝浦らを出し抜いて自分が沙織を守ってやるという根性は立派だが、子供の手で処理できるような状況でないことは達郎にもわかるはず。そう心配しながら事態の推移を見守っていると、ラブホテル内に沙織を保護した（？）達郎が次にとった行動とは？それはあなた自身の目でしっかり確認してもらいたいが、少年たちのネット情報への意欲、渴望がここまで進んでいることに唖然！これでは非常事態の中、彼氏すら信頼できないんじゃないの！こんなニッポンに一体誰がした・・・？

最後のシーンもちょっと危ういのでは？

この映画のタイトル『誰も守ってくれない』はすごくインパクトがある。そして、「犯罪者家族の保護」をテーマとしたこの映画では、マスコミ攻撃にさらされる沙織のみならず、それを保護しようとする勝浦も共にターゲットにされる、恐ろしい今の日本の実態が次々と描かれていく。そんな犯罪者家族への攻勢は一生続くの？映画の中ではそんな質問に対して「YES」と答えるシーンもあるが、実はマスコミの興味は移ろいやすい。そのうえ、マスコミの興味を集める犯罪は次々と起きていくから、沙織へのマスコミ攻勢が一段落する最大の要因は、次の凶悪事件が起きること。

そんな、あなた任せの要因によって現に沙織と勝浦へのマスコミの取材攻撃も潮が引くように鎮静化していくのだが、この時点に至ってやっとここまで逃避行を続けてきた沙織と勝浦との間に信頼関係と共に不思議な絆が生まれることに。この映画のラストはそんなストーリーの必然的な結末で、ある意味ハッピーエンド。つまりこの映画のラストシーンは、2人が海辺に座り、勝浦が沙織の肩を温かく抱いてやるシーン。

しかし、ちょっと待てよ。興味本位のマスコミが、こんなシーンをもしフォーカスしたらどうなるの？ひょっとして「色魔刑事が保護すべき少女を熱く抱擁」なんて見出しで週刊誌に載るのでは？そんなくだらない心配までしなければならぬのはナンセンスの限りだが、無防備な2人の姿をみていると、これは映画の上だけの設定にしなければ・・・。

2008（平成20）年11月4日記



「誰も守ってくれない」

(1月24日、TOHOシネマズ
梅田ほかで公開)

一体誰から、何を守るの？

フランスが人権の元祖
 国なら、日本だって人権
 尊重の国。凶悪事件の容
 疑者の人権と共に犯罪者
 家族の保護も大切だ。そ
 んな珍しい視点の問題作
 が登場！

元巨人軍の趙成瑛投手
 の妻だった美人女優崔真
 実が自殺したのは昨年十
 月。原因は資金をめぐる
 悪質な噂がネット上で
 飛び交ったため。これを
 機に韓国ではネット規制

を強める「崔真実法」が
 与野党間で激論された
 が、さて殺人犯として逮
 捕された船村少年の妹、
 中三の沙織(志田未来)
 とその両親へのマスコミ
 を失継ぎ早に。本当にこ
 んな風景ってあるの？
 こんなに手厚く保護して
 も、パニック状態に陥っ
 た母親がトイレ内で自殺
 したらそれも警察の責任
 ？ 情報が瞬時に飛び交
 う時代状況の中こんな問
 題が次々と提示される
 が、さてその回答は？

それを保護する刑事が
 勝浦(佐藤浩市)だが、
 そんな任務って本当にあ
 るの？ マスコミが下校
 時の沙織と船村家を取材
 するのはパンチあるコメ
 ント取得のためだが、そ
 んな奇襲を国民は本当に
 求めているの？ また家
 庭裁判所関係者が出張
 し、「容疑者家族の保護
 マニュアル」に則り①
 父母の離婚と再婚②母と
 沙織の旧姓への変更③沙
 織の就学義務免除手続
 を吐露した大人の会話。
 少しずつフラッシュバック
 クされるあの事件の全貌
 とは？ その責任者は？
 一気に噴出するマスコミ
 報道は潮が引くのも早
 い。A事件に飽きれば、
 またB事件が起きれば興
 味と関心はたちまち移
 行。すると、「永遠に続
 くさ」と言われた沙織と
 勝浦の逃避行の結末は？